

書道四十年・書学四十年の歩み

都留文科大学国文学科助教授 宮澤 正明

今から十年前、私は書道の教員として都留文科大学に着任いたしました。と同時に、十日市場の団地に越してまいりました。社会人としてのすべての第一歩を、この都留市と都留文科大学で踏み出させていただいたことになりました。

静岡の三島市出身なので、富士山は此の方向にあるものといった感覚が身につけていたもので、

しばらくの間、方向感覚にとまどいながらも、日常生活や大学には何とか慣れることができました。それは、団地でも大学でも、とにかくどこへ行っても都留市の方々のあたたかい心にふれることができたからだと感謝いたしております。そして、私を教員として奮立たせてくれたのは、都留文大生のG君の出現でした。

着任して間も無い四月のある日、当時二年生だったG君が私の研究室にやって来て、「小・中学校の書写教育のことで卒業論文が書けるでしょうか」と尋ねたのです。私は逡巡してしまいました。突然ということもありましたが、実は大学、大学院を通じて書写教育にはあまり手を染めていなかったの

で自信が無かったです。しかし、

文大の多くの学生が小・中学校の教師を志している以上、書写教育に関心を持つのは当然だ、このよ

うな学生の期待に応えることが文大での私の仕事なのだ、と一大決心をし、まだ学生気分が抜けないすっとんきょうな調子で「よし、じゃあ一緒にやってみようか」と返事をしたのです。

G君と彼が声をかけて参加した三名とによって、いわゆる「書道自主ゼミ」が、その日から何日も

からず誕生したことを覚えて

います。自主ゼミは、文字通り自主的な運営であり授業科目ではありません。しかし、彼らは休むことなく研究室に通い、何も言わなくとも書道用具を準備し、さらに書写教育の課題を投げかけてき

ました。こんな積極的姿勢をとられるものから、私も知らぬ間に書写教育研究の深みにはまってしまったのです。昼過ぎから夜九時

まで大学で、さらに茶店に入って深夜まで討論し続けたことは数えきれません。時に、G君の下宿まで行って朝まで話し込むことさえありました。

それから四年後、書写教育の研究をもっと深めたい、というG君



が卒業し、その数も三十名近くに達しました。多くの卒業生が教員になって活躍をしています。もちろん現役の書学ゼミ・自主ゼミ生も頑張っています。例年一月に、文化会館で書写展を催しています

が、原稿用紙百枚の卒業論文と書展の作品の追い込みが重なる四年生にとっては、学生生活の中で最も過酷な一年であると同時に、最も充実感を味わう一年でもあります。研究室で作品を書いたり、卒論の勉強をしたり、といったゼミ生の姿を見ると、つい甘い言葉をかけたくりますが、心を鬼にして「まだまだ

合格サインを出しません。それでもへこたれる学生は今まで一人もいませんでした。むしろ、「今、何物にもかえがたいことを経験しているんだから、もっと教えてください。」と目が訴えている

ことの方が多いうです。こんな時、学生がとてもしんどいが見えます。大粒の汗をポタポタ紙に落として書いている者、思うように書けず目を赤く腫らして書いている者、意味不明の

かけ声を発して書いている者、ひざ小僧から今にも血がにじみ出そうになっても黙々と四つんばいになって書いている者、授業があるのをすっかり忘れて書いている者、かわい顔に墨のひげをつけて真剣に書いている乙女、そして白紙に向かって何やら祈っている者など、みんなスゴイのです。各人が紙切れ一枚のためにこんなに心血を注いでやっています。

毎年の書写展には、市民の方々にもよく来ていただいております。その折に書いていただくアンケートの感想を、学生はこの上ないごほうびとしてとらえているようです。アンケート箱を開ける時の学生の表情は、まるで玉手箱を開けるような顔つきです。都留文大生とうにも見えます。私も心を鬼にしてよかったと思う瞬間でもありません。目標を持った学生のパワーは底知れませんが、ゼミ生を見ている限り、「とかく今の学生は……」と私には言えません。ここにのせた一枚の写真は、今年の書写展の最終日に撮ったものです。小さく見えないかも知れませんが、満足感あふれる表情と、焦点の定まった目がすべてを語っているようです。

研究室には、G君が卒業記念に買って買ってくれた時計が掛けてあります。後輩達を見守りながら、ゼミの歴史を今も確実に刻み込んでくれています。